「襞のあわいに深く入り込んでいって…」をめぐって（2）

襞のあわい――その火口②

天理大学人間学部教授
松田　健三郎　*Kensaburo Matsuda*

前稿ではとりあえず、「襞のあわい」の立ち現れとし、それを火口とすることが「おなじ」に確認された。フランス人宣教師プティジャンにおずおずと近づく隠れキリシタンたち、その一婦人によることば、「ここにおります私どもは、みなあなた様とおなじ心でございます」におけるそれである。このことばに、嘘偽りは、いかなる意味でも、ない。しかし、その心において「おなじ」であるはずの宣教師プティジャンに、かれらキリシタンの教理はつぎのようなことばを吐露せしめる、「御主様の御生贄も、十二使徒も、御復活も、なにもかもめちゃめちゃです」。かれをその体現とするローマ正統教理から大きく逸脱し、異端ともいうべき形態に変形していることに、プティジャン自身やがて気づくことになるからだ。しかし、それでもというか、いや、それだからこそというべきなのだが、「おなじ」というこのことばに嘘偽りはない、いかなる意味においても。

もちろん、これらのことばはいずれも、前稿にみるように、純文学、たとえば『沈黙』にたいする大衆小説『姫君何処におらすか』における、史実をベースとしつつも、純然たるフィクションにすぎない。しかし、「宗教の本質」、「聖性というものの本質」をめぐる、立問を経ての、ある意味、帰結とでもいうものである。

さて、宣教師プティジャンのことばは、やがて、文字通り、「なにもかもめちゃめちゃです」という事態として現成する。同時に、しかし、問題とされる「おなじ」の嘘偽りなきこともこの事態の現成をとおし確認されていくのである、「襞のあわい」の立ち現れとして。

まずは、宣教師プティジャンのことばの事態としての現成を『姫君何処におらすか』にみていこう。1866 年 2 月 28 日付け教区長宛の書簡にある、プティジャンの報告である。

> ……あの日は、ちょうど切支丹歴で、謝肉……これ以上、私にはかけません。おお、神よ、
> この私の頭をうちくだきたまえ。……教区長様、私にはもう書けません。…
>
> 私は、今、すがりつくように、お贈りしていただいた聖なる銀の匣を開いたところです。ザヴィエルさまの御遺物に礼拝したところです。……
>
> おお、私は意気屈してはなりません。恐れてはなりません。教区長様からいただいたこの聖なる腸の一片は、いま私に新たなる力をふきこんでくれました。

『姫君何処におらすか』の掉尾を飾る一節である。

「謝肉……これ以上、私にはかけません」と「意気屈し」かかる宣教師プティジャンを、ザヴィエルの「聖なる腸の一片」が「いま私に新たなる力をふきこんでくれました」という事態――謝肉、そして聖なる腸とは……。

この年、長崎奉行は最後のキリシタン大弾圧を断行する。部漣島にもその手は及び、捕吏の群が押し寄せ、島のひとびとを捕らえ竹矢来で囲んだ獄をつくり追い込んだ。以下『姫君…』の記すところである。

> 私が部漣島についた朝、……竹矢来をかこむ数十人の役人すべてが、気がちがったようさわぎまくっていました。……
>
> まえの晩は、暗い、冷たい、氷獄のような夜でした。……真夜中ごろ、それまで音もなかった竹矢来の中の囚人たちが、しずかに唄いだしました。
>
> 「参ろうや、参ろうや、天国の寺に参ろうや……」
>
> それは、はじめ地からわき出るようにひくく、かなしく、制止する機会もないうちに、暗い潮と織りなされる大合唱となって、はてはまるで酒宴でもひらいてるようにたからかなものになりました。……
>
> 「ベレンの国の姫君、いまはどこにおらすか、御讃え尊めたまえ……」
>
> そして、この声もやがて陶酔したように歓喜の讃歌となりました。
>
> 朝が来ました。三百数十人かの囚人たちは昨夜の狂態は夢かと思われるほどひっそりと、鴉の群のようにうずくまってうなだれておりました。役人たちが第一番めによび出そうとしたのは、この島の邪宗門の妖姫とも目されるあの女でした。
>
> ところが……彼女の姿はどこにもなかったのです。
>
> 昨夜はたしかにいた。……それにもかかわらず、『ベレンの姫君』は消滅してしまった。……あの白髪のパオロ徳蔵 (島の帳方：筆者注) が悲しげに答えたそうです。
>
> 「お影さま（聖母マリアに擬せられたイエスの情人：筆者注）は、昨晩、天に登られましたじゃ」
>
> ……敬三郎（宣教師プティジャンの道案内の少年：筆者注）は、……あきらかにもう気のちがった眼で、ときどきくちのはたのよごれをぬぐいながら、ひとりつぶやいていました。
>
> 「御主、群衆に命じて地に坐さしめ…七つのパンと魚とをとり、謝してこれを裂き弟子たちに与えたまえば……弟子たちこれを群集にあとう。すべての人食らいて飽き、裂きたるあまりをひろいしに、七つの籠にみちたり……」
>
> 「とりて食らえ、これはわがからだなり。……なんじらみなこの盃より飲め、これは契約のわが血なり。……多くの人のために罪のゆるしを得させんとてながすところのものなり。……」
>
> あの「お影さま」がいなくなった、ということがわかったのはそのときです。……
>
> ……私の頭には……それよりももっと化物じみた黒い雲のようなあるかんがえが浮かんできそうです。

さきのことば、「あの日は、ちょうど切支丹歴で、謝肉……これ以上、私にはかけません。おお、神よ」がここに接続する。「なにもかもめちゃめちゃです」ということばが事態として究極に現成する所以である。しかし、くりかえすが、この事態の現成が、「襞のあわい」の立ち現れとしての「おなじ」、部漣島のキリシタンの一婦人のことば、「ここにおります私どもは、みなあなた様（宣教師プティジャン：筆者注）とおなじ心でございます」の、いかなる意味でも、嘘偽りなきことを確認させているのである。